

日本映画学会会報

第75号 (2025年7月31日)

The Japan Society for Cinema Studies (JSCS) Newsletter

発行・編集 日本映画学会 (会長 吉村 いづみ) / 編集長 藤城 孝輔

事務局 北海学園大学人文学部 大石和久研究室内 〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4-1-40

事務局メールアドレス japansocietyforcinemastudies@yahoo.co.jp

学会公式サイト <https://japansociety-cinemastudies.org/>

学会公式ブログ <http://jscs.exblog.jp/>

目次

視点 カウボーイのアメリカの再始動——トランプ、ビヨンセ、ハーブ・ジェフリーズ 川本 徹 2

視点 映画・アニメーション研究と定量分析の接続 佐野 明子 11

新刊紹介 三島わかな編、名嘉山リサほか著『メディアのなかの沖縄イメージ——文化創造の100年』藤城 孝輔 16

新入会員自己紹介 中国第六世代監督を研究するまで、あるいはこれから 李 欣欣 19

出版紹介 22

新入会員紹介 22

● 視点

カウボーイのアメリカの再始動——トランプ、ビヨンセ、ハーブ・ジェフリーズ

川本 徹（名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授）

「俺は幸せなカウボーイ」——ハーブ・ジェフリーズ¹

2024年、アメリカでカウボーイハットやブーツがたくさん売れたという。西部劇がまだ人気だった1954年の書きまちがいでない。本当に2024年の話である。

それ以前からカウボーイやウェスタンがアメリカでブームになっていた。カウボーイのスタイルをSNSなどで楽しむイーハー・アジェンダがはじまったのは、2018年²。こうした動きがより広く浸透したのが、2024年だった。

2024年の話をするまえに、次の点を確認しておきたい。カウボーイは一般に、白人の男性、さらにはそのなかでも保守層と結びつきが強いとされている。「カウボーイと言えばアジア系を思い浮かべる」とか、「カウボーイよりもカウガールに詳しい」とか、「カウボーイは性的マイリティの象徴だ」というひとは、あまり多くないはずだ。

アメリカでは大統領がカウボーイになぞらえられることも多い。過去約半世紀で、カウボーイの印象がとくに強いのは、いずれも保守派のロナルド・レーガン（元カウボーイ俳優でもある）とジョージ・W・ブッシュ。それぞれカリフォルニアとテキサスに牧場を持ち、ともにその牧場を「西のホワイトハウス」として使用し、カウボーイのイメージを売りにしていた。ブッシュは、アメリカ同時多発テロ事件後の記者会見では、ウサマ・ビン・ラディンについて「生死を問わず捕まえよ（Wanted: Dead or Alive）」と西部劇の世界と見紛うような発言をのこした。

では、現大統領のドナルド・トランプはどうか。トランプにカウボーイの印象はあまりないが、相性が悪いかと言えば、そんなことはない。例をあげよう。大統領一期目の任期中の2017年7月、ホワイトハウスで「メイド・イン・アメリカ週間」（アメリカの国内企業と労働者を称えるキャンペーン）のイベントが開催された。そこでトランプはステットソンのカウボーイハットをかぶったのだが、その瞬間、大きな歓声と拍手が起きた。この様子を映した動画のコメント欄には、次のような称賛の声が寄せられている。「ベースボールキャップより似合っている」「『新保安官がやって来た』って新しいミームが欲しい」「ワイルド・ウェスト時代の再来だ」（“Must Watch:

President Trump Rocks Cowboy Hat (FNN)”。先述の「カウボーイ＝白人・男性・保守」という結びつきを考えれば、こうした反応は別に不思議ではない。

また、2019年には、反移民政策をかかげるトランプを支援するために、ニューメキシコである団体が結成されたが、その名はずばり「カウボーイズ・フォー・トランプ」。カウボーイ姿で馬にまたがり行進するパフォーマンスで話題を呼んだ（なお、創設者のクワイ・グリフィン は、2021年の連邦議会議事堂襲撃事件に関与したとして、この翌年にニューメキシコ州オテロ郡の郡政委員から解任された）。

さて、以上のことを確認したのには理由がある。2024年の（またそれ以前からの）カウボーイやウェスタンのブームは、こうした従来の印象を一変させるものだからである。

カウボーイに何が起きているのか

2024年、カウボーイやウェスタン関連で起きた出来事で、印象的なものをふたつあげたい。ひとつは、1月にルイ・ヴィトンがウェスタンをテーマとするメンズコレクションを発表したこと。パリで開催されたショーでは、さまざまな人種の男性モデルがウェスタン・スタイルのワードローブを身にまとい、会場をわかせた。ディレクターは、アメリカの黒人ミュージシャンであり、ファッションデザイナーでもあるファレル・ウィリアムス。

もうひとつは、3月にビヨンセが新作アルバム『カウボーイ・カーター』（*Cowboy Carter*）を発表したこと。タイトルが示すとおり、カウボーイ文化をふんだんにとりいれた本作は、商業的にも批評的にも大成功した。アメリカでカウボーイハットやブーツが売れている、というニュースはそれ以前にもあったが、このアルバムや先行シングルの発売後、一気に増えた³。2024年クリスマスのNFLハーフタイムショーのパフォーマンスも圧巻だった⁴。こうして2024年にビヨンセがカウボーイ姿の数百名のダンサー（長女のブルー・アイヴィー・カーターの姿もある）を引き連れて歌を披露するとは、彼女がデスティニーズ・チャイルドで歌っていた四半世紀まえには、多くのひとが予想していなかっただろう。

ビヨンセはさきの大統領選ではカマラ・ハリス支持を公にした。もうひとり、近年カウボーイとの関連で話題を呼んだアーティストに、黒人ラッパーのリル・ナズ・Xがいる。カントリーとラップを組み合わせたシングル「オールド・タウン・ロード」（“Old Town Road”）は、2019年に大ヒット⁵。ビルボードの最長1位記録を更新した。このヒットは先述のイーハー・アジェンダの流れに乗ったもので、結果的にそれを加速させることにもなった。注目すべきことに、リル・ナズ・Xはこの曲のヒット中にゲイであることをカムアウト。加えて、さきの大統領選ではやはりハリス支持を公にした。

実際のところ、イーハー・アジェンダ自体が従来のカウボーイ像に異議をとなえるものであり、参加者には黒人のアーティストやセレブリティが多かった⁶。こうして見てくると、ある疑問がわいてくるだろう。カウボーイは「白人・男性・保守」と相性がよかつたはず。なぜ、それとは異なる勢力が——と書くと、アメリカの分断をいたずらに強調しているように響くかもしれないが——、いまカウボーイに注目しているのか。

さしあたり、3つの考え方があつた。

- ①アメリカ人はみんなカウボーイが好きである。
- ②いままでとは違うカウボーイは、新鮮でおもしろい。
- ③カウボーイはもともと多様だつた。

①は身も蓋もない説明だが、カウボーイがアメリカ独自のシンボルであるのは事実である。また昨今、エスタブリッシュメントへの不満が高まるなかで、カウボーイの庶民的イメージが逆に好感度をましているのは納得がいく。

②は、これまで「白人・男性・保守」と強く結びつけられてきたカウボーイを、あえて別の文脈に置きなおすことによって、新鮮味を生み出せるということである。たしかにそれはあつた。

そして③だが、ここには歴史的な視点があつた。もともとカウボーイは単純なカテゴリーにおさまる存在ではなかつた。それがいつのまにか、「白人・男性・保守」の側に引き寄せられていった⁷。いまおこなわれているのは、カウボーイの本来の多様性をとりもどす試みである——このような見方である⁸。

①～③のどれが唯一の正解ということはないが、ここでは③を強調したい。げんにアメリカ西部史の書物をひもとけば、カウボーイが人種的に多様な集団であつたことがすぐわかる⁹。そもそも「元祖カウボーイ」として知られ、アメリカのカウボーイにさまざまな技術を伝えたのは、メキシコのバケーロである。バケーロは便宜上、「メキシコ版カウボーイ」と説明されることがあつたが、歴史的順序からすれば、アメリカのカウボーイを「アメリカ版バケーロ」と呼ぶべきだろう。また、19世紀当時は、黒人のカウボーイが多かつたことが知られている。カウボーイの4分の1ほどが黒人だつたとも言われる。

19世紀のロングドライブ（牛の長距離輸送）はもっぱら男の仕事だつたが、牧場では女性も活躍した。カウボーイ文化から派生したスポーツ競技、ロデオにおいても、その歴史の初期には女性（しかも人種的マイノリティをふくむ）の活躍が目立つた。いわゆるカウ

ガールが、女の子が憧れる逞しいアスリートから、たんなるロデオのお飾的存在へ、さらにはピンナップガールなど男性の視線の対象に変化していくのは、のちの時代のことだ¹⁰。

ハーブ・ジェフリーズ西部劇とは何か

さて、ではいったい何がカウボーイから多様性のイメージを奪ったのか。その原因として、しばしば槍玉にあげられてきたのが、西部劇（ウェスタン）である。西部劇映画や西部小説が「カウボーイ＝白人・男性・保守」という図式を広め、また強化したということである。なるほど、それはたしかにそうだろう。しかし、西部劇も一般にそう思われているより多様であることは、以前から強調していることだが、ここでも特筆大書せねばならない。1903年の『大列車強盗』（*The Great Train Robbery*）以来、何千という数の西部劇が作られてきた。そのなかには多くのヴァリエーションがあるのだ。そのことを無視した議論は、早計のそしりをまぬかれないだろう。

一例として、ブラック・ウェスタンの歴史をとりあげよう¹¹。21世紀には黒人ヒーローを描く西部劇『ジャンゴ 繋がれざる者』（*Django Unchained*, 2012）や『ザ・ハーダー・ゼイ・フォール：報復の荒野』（*The Harder They Fall*, 2021）が製作されたが、それ以前の1990年代には『黒豹のバラード』（*Posse*, 1993）などがあった¹²。歴史をさらにさかのぼると、1960年代・70年代には、『バファロー大隊』（*Sergeant Rutledge*, 1960）や『砦の29人』（*Duel at Diablo*, 1966）、さらにシドニー・ポワチエが監督もつとめた『ブラック・ライダー』（*Buck and the Preacher*, 1972）などがあった。以上は主流映画産業の内部で生まれた作品だが、その外に目をむけるならば、1970年代のブラックスプロイテーション映画や、1900年代から40年代末の黒人劇場専用映画にも、れっきとした西部劇と呼べるフィルムがあった¹³。最初期のブラック・ウェスタンとして知られる映画のひとつに、『K中隊の兵士』（*The Trooper of Troop K*, 1917）がある。黒人の騎兵隊員がメキシコ軍との戦いで活躍する物語である。長いあいだ、プリントは失われたと思われてきたが、2022年にその断片が発見された。

小論をお読みの方にぜひお伝えしたいのは、こうした作品に再注目するかつてない機会が、いま訪れているということである。なにしろ先述のとおり、アメリカ本国でカウボーイ像の見なおしが大いに進んでいるのだ¹⁴。いま私たちの手元には、オルタナティブな西部劇史を照らすためのサーチライトがある。このライトを使わない手はない。

今後の議論のために、ひとつだけ例をあげておこう。ビヨンセやリル・ナズ・X以降の視点で見なおすと、その真価があらためてわかるのが、ハーブ・ジェフリーズ西部劇である。1930年代以降、ミュージカル西部劇が人気を博し、シンギング・カウボーイの映画スターが誕

生じたことは、多くの方がご存じだろう。ジーン・オートリーやロイ・ロジャースが代表例である。ジョン・ウェインもシンギング・カウボーイを演じたことがある（『伝説のガンマン』[*Riders of Destiny*, 1933] のシンギング・サンディ・ソーンダース）。

シンギング・カウボーイももっぱら白人という印象があるが、これに挑戦したのが、「初の黒人シンギング・カウボーイ」として知られるハーブ・ジェフリーズである。ジェフリーズはまずジャズ・シンガーとしてキャリアをスタートさせたが（この方面では後年のデューク・エリントンとの共演が有名）、1930年代後半に、黒人キャストの西部劇映画を作りたいと立ち、みずから出資者を探した。この思いが叶い、ジェフリーズ主演の一連のブラック・ウェスタンが生まれた（『草原のハーレム』[*Harlem on the Prairie*, 1937]、『ハーレムから来た二丁拳銃』[*Two Gun Man from Harlem*, 1938] など）。ジェフリーズはそこで美声も披露したが、それは当時ジーン・オートリーのミュージカル西部劇が人気を博していたことをふまえれば、理にかなった選択だった。

さきに『カウボーイ・カーター』に言及したときは述べなかったが、ビヨンセはテキサス出身である。テキサスには黒人ロデオの豊かな文化があり、それにふれて育ったのが、ビヨンセだった。その彼女にとって、黒人カウボーイの文化と歴史が見すごされてきたのは、由々しき事態であり、この状況を改善することが『カウボーイ・カーター』の大きなねらいだった。

同じことがジェフリーズ西部劇にも言える。1930年代当時、西部劇は黒人観客にも人気があったが、スクリーンで活躍するのは白人ばかりだった。「待てよ、黒人は西部開拓に貢献したじゃないか」（qtd. in Dempsey 132）。そのような憤りが、ジェフリーズを黒人キャストの西部劇の製作にむかわせた。さらに次のようなエピソードもある。あるときジェフリーズは、黒人の少年が白人の少年たちのカウボーイごっこに入れてもらえないのを目にしたという。ジェフリーズ自身が強調するように、「現実の西部では、カウボーイの4人に1人は黒人だったのに」（qtd. in Dempsey 132）もかわらず、だ。ちなみに、ビヨンセはアイヴィーパークというファッションブランドを持ち、アディダスとコラボしてきたが、2021年にはロデオをテーマとする子ども服を発表し、自分の子どもたちと一緒にロデオ風ファッションを楽しんだ。

ジェフリーズ西部劇は当時大成功したわけではない。また、西部劇研究の世界でも、言及されることはあっても、大注目されてきたわけではない。そもそもミュージカル西部劇の研究はマイナーであるし、黒人ミュージカル西部劇となれば、なおさらである¹⁵。しかし、2025年現在、状況は変わっている。ビヨンセやリル・ナズ・Xといった現在もっともホットなアーティストたちの実践に、ジェフリーズの実践を接続することができるからだ¹⁶。

ここにあげたのはほんの一例にすぎない。カウボーイのアメリカと、それをめぐる文化史が、いま大きく動き出している¹⁷。

* 本稿は 2025 年 6 月 19 日に文化フォーラム春日井でおこなった講演「アメリカ文学・映画・音楽に見るカウボーイ像の変遷」の一部を原稿化したものである。また、本稿は科研費（25K03904）の研究成果の一部である。

註

1. ジェフリーズが『ハーレムから来た二丁拳銃』などで歌った曲のタイトル（“I’m a Happy Cowboy”）、および歌詞。
2. 『赤い河』（*Red River*, 1948）の旅立ちのシーンが具体例だが、イーハー（yeehaw）とは、カウボーイがあげる独特な歓喜の声である。
3. 『カウボーイ・カーター』の発売と前後して、カウボーイ・ファッションの流行に寄与した人物・作品としては、カントリー・シンガーのモーガン・ウォーレン、モデルのベラ・ハディッド、映画『バービー』（*Barbie*, 2023）、テレビドラマ『イエローストーン』（*Yellowstone*, 2018-24）などがあげられる。
4. この「ビヨンセ・ポウル」の様子は Netflix や YouTube のビヨンセのチャンネルで視聴できる。
5. 2018 年 12 月にオリジナル版がリリースされたのち、翌年 4 月にカントリー・シンガーのビリー・レイ・サイラスと共演したヴァージョンがリリースされた。後者のミュージックビデオにはロングヴァージョンとショートヴァージョンがあるが、ロングヴァージョンは短編映画仕立てで、リル・ナズ・X 演じる 1889 年のカウボーイ姿のアウトローが、2019 年にタイムトラベルする物語となっている。
6. イーハー・アジェンダと人種・セクシュアリティの関係、さらには近年黒人騎手がおこなっている社会運動を論じた興味深い文献が、永富「*Racism Ain’t Cowboy*（人種主義はカウボーイではない）」である。
7. 今回の小論ではレーガンやジョージ・W・ブッシュの例をあげ、カウボーイと保守政治の結びつきを確認したが、こうした結びつきも近年生まれたものにすぎないという議論もある。詳しくはカウボーイと米大統領に関する研究書である Smith を参照されたい。
8. カウボーイと関係の深い音楽ジャンルとしてカントリーがあげられる。昨今、アメリカではカントリーの一大ブームが起きており、そこではこのジャンルの潜在的多様性が開花している。白人保守層の音楽と考えられてきたカントリーの多様性と現在の潮流については、永富「*カントリー・ミュージックの新潮流と多様性*」および永富編『*カントリー・ミュージックの地殻変動*』に詳しい。
9. 日本語で読めるカウボーイの歴史書に鶴谷がある。刊行から 35 年以上たつが、19 世紀のカウボーイの実像を概観する上でいまなお有益である。
10. カウガールのイメージの変遷については、Patton and Schedlock を参照。昨今の映画で、男性の視線の対象としてのカウガ

ール像を批判的に描くのが、『バービー』である。一方、活弁な女性としてのカウガール像は、「トイ・ストーリー」(Toy Story) シリーズのジェシーに見られる。なお、『バービー』はポストフェミニズムの文脈で論じられることが多いが、カウボーイとマチズモ、さらにはカウボーイと馬や政治の関係を描いている点で、カウボーイ文化史の文脈でも興味深い。元祖カウボーイ大統領であり、騎馬姿が有名なセオドア・ローズヴェルトと関連づけた議論が必要だろう。

11. ブラック・ウェスタンの歴史の簡明な記述に Pines がある。本稿ではとくに人種に注目したが、当時大きな話題を呼んだ『ブロークバック・マウンテン』(Brokeback Mountain, 2005) の公開から 20 年が経過しようとしている現在、カウボーイとセクシュアリティについても、再考が必要なタイミングに来ている。そのための有益な文献として、19 世紀アメリカ西部文学にクィア・リーディングをほどこし、既存の共同体の外部にいるカウボーイをクィアな存在として再定位した Packard がある。
12. ある記事 (Harrison) で述べられているとおり、ビヨンセの『カウボーイ・カーター』の楽曲のインスピレーション源として、『ザ・ハーダー・ゼイ・フォール：報復の荒野』や南アフリカのブラック・ウェスタン『ファイブ・ウォリアーズ』(Five Fingers for Marseilles, 2017) など西部劇の諸作があるというのも興味深い。
13. 黒人映画の父、オスカー・ミショーの監督第一作『ホームステッダー』(The Homesteader, 1919) も、広義の西部劇と呼べる作品である。ミショー自身の経験にもとづき、サウスダコタに入植した黒人自営農民を描く映画である(同名の原作小説も彼の手になるもの)。ミショー映画における西部(やそれと東部との関係)については、Johnson の第 5 章を参照されたい。
14. 2023 年 9 月から 2024 年 2 月まで、デンバー現代美術館で「カウボーイ」と銘打った展覧会が開催されたのも注目に値する。その内容は、アジア系のケネス・タムやメキシコ系のラファ・エスパルザらの作品をとおして、カウボーイの人種・ジェンダー・セクシュアリティを再考するものだった。展覧会のカタログである Abrams et al. を参照されたい。また、現代文化におけるカウボーイ像の変容を考察する文献に、Jones がある。
15. ジェフリーズ西部劇に関する貴重な文献に、Johnson の第 4 章と第 5 章、および Dempsey がある。
16. すでにビヨンセとジェフリーズを比較するウェブ記事も出ている。一例に Sinclair がある。
17. 一方で、カウボーイをめぐる昨今の喧噪のなかで、逆にその真価が浮き彫りになるのが、カウは登場しても、カウボーイらしいカウボーイは登場しない、ある静かなウェスタンである。ケリー・ライカート監督の『ファースト・カウ』(First Cow, 2019) のことである。本作の西部表象の革新性については、2025 年 7 月発売の『Kelly Reichardt: Six Films/ケリー・ライカート Blu-ray Collection』(東映ビデオ) のブックレット収録の拙論「水上のストレンジャー——『ファースト・カウ』が描く西部の瑞々しさ」を

参照されたい。また、『ファースト・カウ』のある種の原型と言えるのが、カウボーイと牝牛の交流を描く『キートン西部成金』(Go West, 1925) だが、これも 21 世紀以降の視点で見なおすとじつに興味深い一作である。

引用文献

Abrams, Nora Burnett, et al. *Cowboy*. Rizzoli Electa, 2023.

Dempsey, Mary A. "The Bronze Buckaroo Rides Again: Herb Jeffries Is Still Keepin' On." *Black Cowboys in the American West: On the Range, on the Stage, behind the Badge*, edited by Bruce A. Glasrud and Michael N. Searles, U of Oklahoma P, 2016, pp. 131-34.

Harrison, Scoop. "Beyoncé's *Cowboy Carter* Was Inspired by Westerns... And What Else She Has to Say about Her New Album." *Consequence*, Mar. 29, 2024, consequence.net/2024/03/beyonce-cowboy-carter-western-films/

Johnson, Michael K. *Hoo-Doo Cowboys and Bronze Buckaroos: Conceptions of the African American West*. UP of Mississippi, 2014.

Jones, Clint W., editor. *Contemporary Cowboys: Reimagining an American Archetype in Popular Culture*. Lexington, 2023.

"Must Watch: President Trump Rocks Cowboy Hat (FNN)." *YouTube*, uploaded by LiveNOW from FOX, July 18, 2017, www.youtube.com/watch?v=W58e_n0RviQ.

Packard, Chris. *Queer Cowboys: And Other Erotic Male Friendships in Nineteenth-Century American Literature*. Palgrave Macmillan, 2006.

Patton, Tracey Owens, and Sally M. Schedlock. *Gender, Whiteness, and Power in Rodeo: Breaking Away from the Ties of Sexism and Racism*. Lexington, 2012.

Pines, Jim. "Blacks." *The BFI Companion to the Western*, edited by Edward Buscombe, Da Capo, 1988, pp. 68-71.

Sinclair, Greer. "Hollywood's First 'Black Singing Cowboy,' Herb Jeffries, Would Have Loved Beyoncé."

Vanity Fair, Apr. 22, 2024, www.vanityfair.com/hollywood/story/herb-jeffries-hollywoods-first-black-singing-cowboy-would-have-loved-beyonce?srsIid=AfmBOopj1Dp4PxuDL1BKjYmUklSpynD0zzJE6xa3AHq1NB7pob3g5udc.

Smith, David A. *Cowboy Presidents: The Frontier Myth and U.S. Politics Since 1900*. U of Oklahoma P, 2021.

鶴谷壽『カウボーイの米国史』、朝日新聞社、1989年。

永富真梨「カントリー・ミュージックの新潮流と多様性——ステレオタイプを越えて」、『ポップ・ミュージックを語る10の視点』、大和田俊之編、アルテスパブリッシング、2020年、277-303ページ。

——編『カントリー・ミュージックの地殻変動——多様な物語り』、河出書房新社、2024年。

——「Racism Ain't Cowboy（人種主義はカウボーイではない）——ブラック・カウガールズ、カウボーイズの運動から考えるミタリー・カルチャー研究の可能性」、『ミタリー・カルチャーの可能性』、戦争社会学研究会編、みずき書林、2022年、28-37ページ。

● 視点

映画・アニメーション研究と定量分析の接続

佐野 明子（同志社大学文化情報学部准教授）

筆者は統計学者らと共同研究を行い、共著論文“Connecting Character Theory and Quantitative Analysis in Anime Studies: A Case Study on *Kimetsu no Yaiba (Demon Slayer)*”がポップカルチャー研究の国際ジャーナル *Mechademia* 17.2 にオープンアクセスで掲載された¹。アニメ『鬼滅の刃』の4種類のショットの数値データに対して主成分分析やクラスター分析など統計解析を行い【図1】、ショット配置の傾向を示し、栗花落（つゆり）カナヲが最初は目立たないキャラクターとして登場するものの、主人公の竈門炭治郎との関係を通じて「成長」し中心的な役割を担っていく過程を明らかにしたものである。このようにデータの傾向や特徴を示す記述統計によって映像を分析した背景には、レフ・マノヴィッチが実践した文化情報の視覚化²、および「計量映画学(Cinematics)」がある。

定量分析は映画・アニメーション研究にいかに関与するだろうか？ この問いは、筆者がバリー・ソルトの論考「ミッキー・マウスの息吹を計ること——計量アニメーション学の試み」³を読んだ頃から抱いてきた。そして、板倉史明の「日本アニメーションにおけるスタイルと演出」⁴、山本喜久男『日本映画におけるテキスト連関』⁵、北村匡平『24 フレームの映画学』⁶のような計量映画学を取り入れた先行研究に啓発されつつ、今回の論文でようやくひとつの形になった。

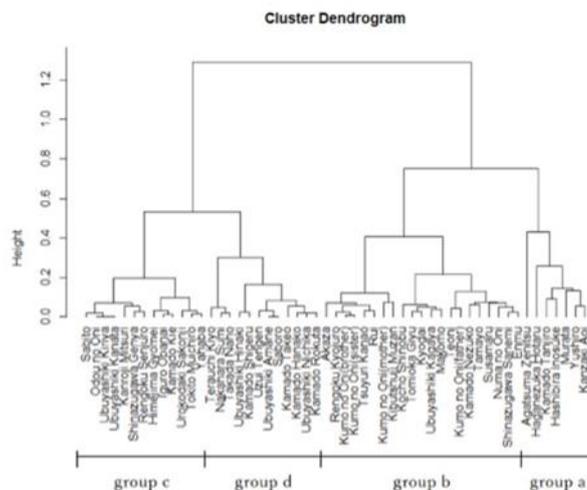


Figure 3. Group division using cluster analysis results (dendrogram).

図1 クラスター分析の結果、53名のキャラクターのショット配置のなかで、栗花落カナヲは類（テレビアニメ第1期の敵の主要キャラクター）と最も類似していることがわかった⁷

ここで、計量映画学について概観したい。計量映画学は「Cinematics」のウェブサイト⁸にこれまでの主要な研究成果が掲示されており、デイヴィッド・ボードウェルも寄稿している。ボードウェルは1970年代以降のバリー・ソルトによる映画の数値データの計量的分析を重視し、A S L (Average Shot Lengths 平均ショット長) を計測するこれまでの研究の流れや自身の研究に言及しつつ、その意義と課題を示した⁹。

重要な研究に、応用統計学者のマイク・バクスターによる *Notes on Cinematic Data Analysis* がある¹⁰。バクスターは統計分析フリーソフト「R」の活用を提唱した。たとえば、ソルトが数値化していたA.ヒッチコックの42作品の7種のショットサイズのデータにたいして、多変量解析(対応分析と回帰分析)を行なった。対応分析では、ヒッチコック作品を3つの時期(イギリスのサイレント期、イギリスのトーキー期、アメリカ期)に分けて、イギリスのサイレント期にショットサイズが最も小さく、イギリスのトーキー期に徐々に大きくなり、アメリカ期にショットサイズが最も大きくなる傾向が示された【図2】。回帰分析では、7種のショットサイズのそれぞれの数値が、およそ40年にわたりどのように変遷したかグラフ化されている。ソルトは映画のデータを大量に測定したが、それらに統計解析があまり行われなかった点にバクスターが着目し、ソルトの数値データをバクスターが活用したかたちになっている。なお、先述した筆者の論文はバクスターと同様に「R」を用いており、バクスターの提案を展開させたものである。

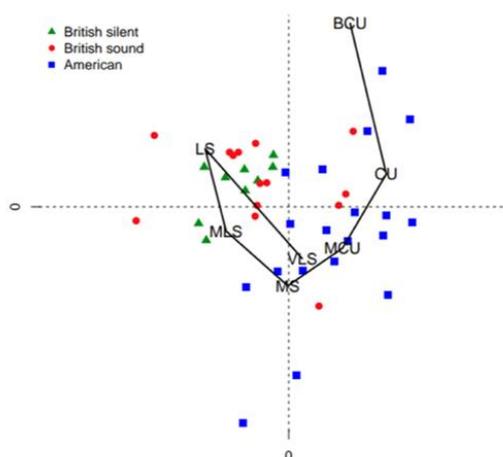


図2 ヒッチコックの42作品のショットデータにたいする対応分析のグラフ¹¹

計量映画学のほか、認知科学や心理学、情報学等においても映像データを定量的に分析する研究が進められてきた。ここでは、ソルトやボードウェルらの研究成果がふまえられており、学際的な映画研究が実践されている点は興味深い。たとえば Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) では、ミシェル・スヴァネラらが、ショットの持続時間お

よびショットサイズの定量分析によって映画作家を特定する方法を検討した¹²。アントニオーニ、ベルイマン、ブレッソン、フェリーニ、ゴダール、スコセッシ、タランティーノ、タルの1943年から2013年までの映画143本を対象とし、形式的な特徴の統計パターンが、個々の作家のスタイルを区別できることを示している。心理学者のジェームス・カッティングは、ボードウェルやクリスティン・トンプソンによる認知学的映画研究を参照しつつ、心理学において映画研究を牽引した¹³。

いっぽう、文字テキストの定量分析（文学、歴史学、言語学など）に目を向けると、自然言語処理技術、つまり大量のデータを自動的に解析し、かつ、オープンソースになりうる精度を備えたツールが既に広く使用されている。

映像に関する文字テキストに対しても近年、自然言語処理を行う研究が散見される。たとえば経営情報学の視点から、映画レビューサイト「Filmarks」に寄せられた『鬼滅の刃』と『君の名は。』のレビューに対して頻度分析や共起ネットワーク分析が行われ、2作品の評価に繋がる共通要因が検討されている¹⁴。Nature 関連誌 *Palgrave Communications* に掲載された、映画産業のジェンダー・ギャップを検討する論考では、IMDb の文字データとセリフ字幕のデータセットを融合したコーパスが作成され、およそ100年にわたる映画の女性登場人物のジェンダー・バイアスが調査された¹⁵。その結果、女性の役割に改善傾向が見られ、女性登場人物の中心性が上昇していることが明らかになっている。

このような研究動向を鑑みて、筆者は今後、映像テキストに加えて、セリフのような文字テキストもあわせて、映像を定量的に分析する方法を模索していきたい。筆者が勤務する同志社大学文化情報学部の学部・大学院教育では、複数の教員が共同で担当する授業があり、次年度は、言語学の教員とともに、映画の文字データにたいしてテキストマイニングを行う授業を計画している。

ほかに、定量的な映像研究をデジタルアーカイブ研究に架橋する試みも行っている。デジタルアーカイブ教育と認知科学の同僚の教員とともに、デジタルアーカイブを活用した学校教育用の教材作成を今年度の3年次演習科目において実践してきた。戦後80年を考えるために、4つのデジタルアーカイブ（「日本アニメーション映画クラシックス」「フィルムは記録する－国立映画アーカイブ歴史映像ポータル－」「NHKアーカイブス」「神戸映画資料館デジタルアーカイブ事業」【図3】）のなかから映像をひとつ選び、映像分析（表象分析と計量分析）を行なったうえで教材を作成するグループワークを春学期に進めた。秋学期はさらに、教材を用いて模擬授業を行い、受講者の視線をアイトラッカーで計測し、受講者が教材をどのように認知するか分析していく。また、完成した教材は、映像の提供元となっているアーカイブ機関で活用してもらえるよう各機関にお渡しする予定である。

こうした映像の利活用は、アーカイブ機関と研究教育機関が相互に利益を得るサイクルになると期待される。筆者は神戸映画資料館のデジタルアーカイブ事業（文化庁メディア芸術アーカイブ推進支援事業）に2021年度から参加しているため、今後、神戸映画資料館で教材をどのように活用していくか考えていきたい。



図3 神戸映画資料館の所蔵アニメーションフィルムのデジタルアーカイブ事業¹⁶

註

1. Sano Akiko, Doi Seina, Tsuchida Jun and Taguchi Tetsuya. "Connecting Character Theory and Quantitative Analysis in Anime Studies: A Case Study on *Kimetsu no Yaiba (Demon Slayer)*." *Mechademia* 17.2, summer 2025: 32-50. <https://muse.jhu.edu/pub/23/article/960859> (2025年6月1日確認)
2. Lev Manovich. *Cultural Analytics*. MIT Press, 2020.
3. バリー・ソルト「ミッキー・マウスの息吹を計ること——計量アニメーション学の試み」、川本徹訳、『アニメーションの映画学』、加藤幹郎編、臨川書店、2009年、197-238頁。
4. 板倉史明「日本アニメーションにおけるスタイルと演出——草創期から第二次世界大戦まで」、『交錯する映画——アニメ・映画・文学(映画学叢書)』、杉野健太郎編、ミネルヴァ書房、2013年、3-30頁。
5. 山本喜久男著、奥村賢・佐崎順昭編『日本映画におけるテキスト連関——比較映画史研究』、森話社、2016年。
6. 北村匡平『24フレームの映画学——映像表現を解体する』、晃洋書房、2021年。ほかに、計量的な分析を含む論考が以

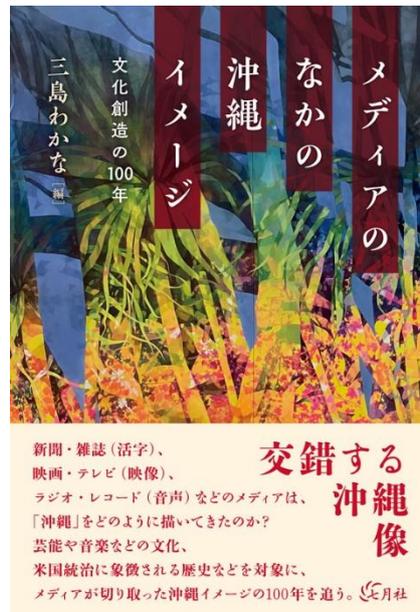
下に収録されている。加藤幹郎『映画の領分——映像と音響のポイエーシス』、フィルムアート社、2002年。木下千花『溝口健二論——映画の美学と政治学』、法政大学出版局、2016年。

7. Sano et al., op. cit., p. 43.
8. 「Cinematics」<https://cinematics.uchicago.edu/> (2025年6月1日確認)
9. David Bordwell. "Precise Tools in Film Studies." <https://cinematics.uchicago.edu/article/5dcb488e-0f5c-4a5c-824b-a052518861ba?returnTo=%2Farticles> (2025年6月1日確認)
10. Mike Baxter. *Notes on Cinematic Data Analysis*.
<https://ochre.lib.uchicago.edu/ochre?uuid=4b704e50-137b-4f1d-9a18-d80b9a5ae1a0&load> (2025年6月1日確認)
11. Ibid., p. 97.
12. Michele Svanera, Mattia Savardi, Alberto Signoroni, András Bálint Kovács and Sergio Benini. "Who is the Film's Director? Authorship Recognition Based on Shot Features." *IEEE MultiMedia*. Volume 26, 4, Oct 2019: 43-54.
13. ヒューゴー・ミュンスターバーグからボードウェル、2000年代以降の認知心理学的な映画研究へ至る経緯については以下に詳しい。板倉史明「ヒューゴー・ミュンスターバーグ——その遺産と認知主義的映画研究」、『映画論の冒険者たち』、堀潤之・木原圭翔編、東京大学出版会、2021年、8-19頁。
14. 小川哲司「テキストマイニングとネットワーク分析を用いた映画評価の要因分析」、『経済経営論集』29(2)、2022年、26-35頁。
15. Dima Kagan, Thomas Chesney and Michael Fire. "Using Data Science to Understand the Film Industry's Gender Gap." *Palgrave Communications* 6, 2020: 1-16.
16. 「調査研究事業」、『神戸映画資料館』、<https://kobe-eiga.net/cinema/research/> (2025年6月1日確認)

●新刊紹介

三島わかな編、名嘉山リサほか著『メディアのなかの沖縄イメージ——文化創造の100年』、七月社、2025年

藤城 孝輔（岡山理科大学教育学部講師）



地域研究が一般的にそうであるように、沖縄学もまた学際的な研究分野である。沖縄学の学術大会やシンポジウムに顔をだすと、歴史学から文化人類学、文学から社会学まで多彩なバックグラウンドの研究者たちがありとあらゆる研究手法を動員して「沖縄」という場を論じており、刺激を受けることが多い。本書も学際的なメディア研究をめざした1冊であり、沖縄をめぐる音楽、映画、組踊、児童雑誌といった大衆文化のメディアが俎上にのせられる。各章であつかわれている時代も、19世紀半ばのペリー来航から東日本大震災以降まで非常に幅広い。

編者の三島わかなが近現代の沖縄音楽史を専門としていることもあってか、全7章のうち4章が音楽に関係した論考である。第1章「原風景から多元的な自画像へ——テレビ番組『みんなのうた』が描く現代沖縄像」（三島）は、NHKの音楽番組『みんなのうた』における沖縄表象の変遷をたどる。放送開始当初は日本の一地方の民謡として沖縄民謡が放送され、1970年半ばからはオリジナルソングを通して沖縄の歴史や記憶に焦点があてられたのに対し、2000年以降は多文化共生の要素として沖縄イメージが動員されてきたことが示される。第2章「軍楽隊、学校行進バンドと間接的琉米親善——USCAR時代のテレビ番組」（名嘉山

リサ)では、琉球来航時に軍楽隊を威圧と友好の手段として利用したペリー提督をひきあいにする事で、第二次世界大戦後の米軍占領下における米軍主導の学校行進バンドが琉米親善とパターンリズムの両面の意味を兼ね備えていたことがあきらかにされる。

第3章「沖縄ポップの作品創出とリズム様式の確立——一九七〇～九〇年代レコード・CDアルバムの展開から」(久万田晋)

では、1990年代に隆盛を迎えた沖縄出身のミュージシャンらによる「沖縄ポップ」が沖縄の伝統音楽のリズムの引用を通して沖縄の民族的アイデンティティーを表現していたことが論じられる。そして、第4章「故郷をつなぐメロディー——戦後ハワイの邦字新聞・ラジオから見る沖縄救済運動と芸能の記憶」(遠藤美奈)は、戦後のハワイの日系移民コミュニティで起こった沖縄救済運動において、沖縄の戦禍を情緒的に伝える手段として歌が果たした役割を解きあかす。

つづく後半の3つの章では、沖縄を描いた戦前の映画、琉球の伝統歌舞劇である組踊、児童雑誌のルポルタージュという「物語」を語るメディアがとりあげられる。前半においてもNHKやUSCARによって制作されたテレビ番組などの映像にたびたび言及されるが、本書の後半のほうが映画研究とより近い立ち位置にあるように思われる。第5章「スクリーンをめぐる葛藤——一九三〇年代の劇映画と沖縄」(世良利和)は、フィルムの現存していない『敵艦見ゆ』(上砂泰蔵監督、1934年)、『南海の大和魂』(監督名不明、1934年)、『オヤケ・アカハチ 南海の風雲児』(重宗務/豊田四郎監督、1937年)の3作品について、同時代の新聞や雑誌記事を手がかりに製作の背景や沖縄ロケの有無、公開後の県内外における受容を調べ、当時の日本の軍国主義プロパガンダとの関連や時代考証のずさんさに対する観客の不満を指摘する。一方、第6章「組踊の「古典、化——近代沖縄の新聞にみる組踊の動向から」(鈴木耕太)では、第5章と同様に新聞資料の調査を研究手法に用いて、琉球王国時代に国賓をもてなすために演じられていた組踊が、保存および継承されるべき古典劇として位置づけられたのが大正時代であったことが突き止められる。そして最後に、第7章「『女学生の友』が醸成した「沖縄」観と功罪——一九五〇～七二年の少年少女雑誌」(齋木喜美子)では、沖縄復帰前の日本の子ども向け雑誌が本土と沖縄の読者の誌面上での交流の場として機能していた反面、過度なセンセーショナリズムに特徴づけられた米軍統治下の沖縄の状況を伝える記事が本土の読者が沖縄を対岸の火事と見なす一因となっていたという主張が展開される。

各章で研究対象となるメディアや時代は多種多様であるものの、沖縄映画を専門とする評者の目にはそれぞれの時代の映画との関連が浮かびあがってくる。ワールド・ミュージックの流行による沖縄ポップの人気の高まりは、石垣島出身の高嶺剛の『パラダイスビューー』(1985年)や『ウンタマギルー』(1989年)、さらには『パイナップルツアーズ』(真喜屋力/中江裕司/當間早志監督、1992年)といった映画の評価とも深く関わる現象である。また、2000年代ごろの『みんなのうた』で多文化共生の観点から沖縄

表象がとりあげられたという指摘は、沖縄で撮影された同時代の日本映画にもあてはまる。さらに、復帰前の沖縄の社会問題に若い本土の読者の関心を向けようとした児童雑誌は、東陽一のドキュメンタリー映画『沖縄列島』（1969年）や森口豁が数多く手がけたテレビドキュメンタリー番組をただちに想起させる。本書のような個々のケース・スタディーとしてのメディア研究は、今後、メディアの違いを超えた包括的な沖縄表象史研究に寄与することが期待できるだろう。

●新入会員自己紹介

中国第六世代監督を研究するまで、あるいはこれから

李 欣欣（放送大学大学院修士課程）

通訳や観光業などに携わる傍ら、50代の自分が、「中国第六世代監督作品におけるリアリズムの道筋（仮）」という研究テーマに取り組んでいます。

ここまでいろいろな方に導かれたような気がします。出身地の中国吉林省長春市で、小学生の時に父に連れて行ってもらい、高倉健主演の『君よ憤怒の河を渉れ』を見たことや、就職先の中国対外友好協会の文化交流部で、主演女優の中野良子さんの取材通訳を担当した日も鮮明に覚えています。

来日後、転勤族の子育ての孤独と憂鬱は、世界各国の映画によって癒され、瀬戸内海の風で現代詩の世界に没頭しましたが、首都圏に引っ越してから、脚本家の母のご縁で、フリーランスとして中日の映画脚本家のシンポジウムの通訳を経験。東日本大地震で戻った北京でもらった『百歳の流儀』（新藤兼人著）、『新藤兼人伝』（小野民樹著）を翻訳する機会が、その後、中国大手メディア「21世紀経済報道」の文化欄で、新藤監督、脚本家の黒沢久子、荒井晴彦についての記事執筆につながりました。

コロナの間に吉林大学外文系の同期に拾われ、「利益より伝承 京都の老舗」（共著、『解説日本』、中国国家行政出版）、「日本資本主義の父渋沢栄一」（共著、『解説明治』、中国国家行政出版）を執筆する際に、在野の自分の貧弱な学術論文力を痛感しました。一方、大学時代の恩師・広岡守穂先生からもらったお題で、「中国のエミリー・ディキンソン？ 余秀華について」（共著、『社会のなかの文化』、中央大学政策文化総所研究会）を書いて以来、母国にも視線を向け始めました。そして、日本映画学者の晏妮先生から与えてもらった翻訳の仕事では、三人の日本の学者先生の論文に一文一文向き合あった時、学術が如何に歴史の真実をあぶりだすのかを垣間見ました。

2020年以來 WeChat ブログに綴った中国語の自己流の映画評も、もう60本もありましたが、そろそろ重い腰をあげて学術の扉をあけたいと思ったところ、昨年野崎ゼミに温かく受け入れてもらいました。

第六世代とは、張芸謀（チャン・イーモウ）など世界から注目されてきた中国第五世代映画監督以後に現れ、1990年代初頭にアンダーグラウンド映画（検閲を通していないので国内では上映できない）で知られた、王小帥（ワン・シャオシュアイ）、賈樟柯（ジャ・ジャンクー）、婁燁（ロウ・イエ）、張元（チャン・ユアン）など北京電影学院の出身者を中心とする者です。

低予算の中国インディペンデント映画の先駆と言われる彼らは、国際映画祭で受賞したにもかかわらず、国内の映画検閲制度で、中国本土で公開禁止や上映中止されました。この国内外の受容における差異は、価値観分断の交差点に思われます。

自分の研究は、三つの目線から代表作の分析を試みます。

第一は、多元化された第六世代の作品から感じ取る禁忌、社会問題に挑む意識と勇気、主題、題材、物語、長回し、ノワール色、ノスタルジア（郷愁）、廃墟美、時代歴史の記録性など、作品内部におけるリアリズムを考察します。

第二は、第五世代の作品やほかの作品と比較しながら、第六世代におけるリアリズムの系譜を考察します。

第六世代は、世界映画の文脈においてネオリアリズムなどからの影響を受けたとよく言われていましたが、日本の独立プロ、新中国前の映画作品からのリアリズムの影響も見られます。

1930年代～40年代の『街角の天使』（『馬路天使』、1937年）『冢々の灯』（『万家灯火』、1948年）等、中国映画にはもともと優れたリアリズムの伝統がありました。陸紹陽は、『20世紀中国映画の写実伝統』（北京映画学院学報 2001年第4期）で、「その時のほとんどの映画は、まだ社会映画であるが、説教をしない、映画は、何かを発見すべく、何かを普及させるためではない。」「当時の映画は、普通の人々に生活に近く、もし中国映画が何回か中断されずにずっとこの伝統を続けたら、少なく映画の中で各時代の様相が見られるはずである」と論じました。¹

文化大革命後、第四世代監督は、バザンやクラカウアーなどのリアリズム映画理論、ネオリアリズムなどを吸収し、討論を重ね、模索をしました。その突破が不徹底だという自分の認識を、払拭してくれたのは、謝飛（シェ・フェイ）監督の「黒い雪の年」（『本命年』、1990年、ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞）でした。また謝飛などの第四世代監督は、北京電影学院の先生として、第六世代監督たちに教えてもいました。

第三は、第六世代監督作品のリアリズムに関する、社会的な背景の変遷、検閲、興行と海賊版のリスクなどの受容関連の外部要素の影響を考察します。

新中国の成立後、ソ連の影響で始まった社会主義リアリズムが、現在ではなくなったのでしょうか。

今年の3月に新しい中国電影博物館を訪ねた際に、改革開放の新時期中国映画に関する序言から、改めて現在中国映画における検閲審査管理と商業興行など、二重の基準が働いていることに気づきました。

つまり1978年12月の中国共産党の第11回三中全会は、中国の新しい社会主義現代化建設の新時期のスタートを象徴していると言われ、中国映画も中国特色社会主義文化の建設と、社会主義市場体系を整えるという二つの目標の下で、芸術創作と体制改革を基礎にしていました。

いまでも政府の検閲を受け、「龍標」という上映許可書をもらわなければ、第六世代監督などのアート映画は、社会主義リアリズムの経脈を継承した「主旋律映画」、商業ペースの「アクション映画」「アニメ」などが参与している中国国内映画産業市場で公開できないし、中国映画として、海外映画祭にも出品できないことになっています。

中国に古くから「読万卷書、行万里路」（「万卷の書を読み、万里の路を行く」）という言葉があります。

これまで王小帥監督、賈樟柯監督のプロデューサーを務めた市山尚三先生が、ご多忙の中で快く取材に応じてくださり、貴重なお話を聞きできたおかげで、今後もこの研究課題に向けて、書籍資料だけではなく、同時代の現場の声をできるだけ自分の足で集めていきたいと考えています。

註

1. 丁亜平編集『百年中国映画理論文選』、中国文聯出版社、2016年、第三巻、周湧、馮欣『中国映画産業化文脈の中の現実主義問題』p. 267、原出所2011年『電影芸術』（第2期p. 267）

● 出版紹介

- 徐玉会員（単著）『女を見る女のまなざし——日本文芸映画における女同士の絆』、大阪大学出版会、2025年2月。
- ジャック・ランシエール著、堀潤之会員訳『映画の隔たり』、青土社、2025年、3月。
- 三島わかな（編著）／名嘉山リサ会員（共著）『メディアのなかの沖縄イメージ——文化創造の100年』、七月社、2025年4月。
- 巽孝之監修、塚田幸光会員ほか（編著）『映画で読み解く現代アメリカ2——トランプ・バイデンの時代』、明石書店、2025年5月。
- サウンディングズ英語英米文学会監修、杉野健太郎会員／下楠昌哉（編著）『スポーツする英語文学』、金星堂、2025年5月。
- 川本徹会員（単著）『トイ・ストーリー講義——もうひとつのアメリカ文化史』、平凡社、2025年6月。

※出版情報につきまして

書評対象となる書籍につきましては、ご惠贈いただければ幸いに存じます。（書評対象の選定につきましては「日本映画学会報執筆規定」をご参照ください）。また、書評対象ではない書籍の出版に関しましては事務局に情報をいただければ会報にて紹介いたします。

● 新入会員紹介

- ト部 倫子（東京科学大学修士課程）、ホン・サンス、韓国映画
- 岩野 郁也（東京科学大学大学院修士課程）、ニュークシアシネマ
- 李 欣欣（放送大学大学院人文修士課程）、中国第六世代監督映画論
- 李 佩霖（熊本大学大学院博士後期課程）、フェミニズム映画理論
- 岡部 駿（学習院大学大学院博士前期課程）、ジャン＝ピエール・メルヴィル論
- Zachariah BATSON（公立小松大学大学院博士後期課程院生）、日本のゲームと映画研究
- 孫 ヒョクジュン（立教大学異文化コミュニケーション研究科博士後期課程）、リアリズムと社会的テーマの重要性
- クラベル・ヘルナンデス・エレナ（東北大学文学部現代日本学研究室博士課程）、20世紀前半の戦国時代劇

- 両角 佑子（国立アイヌ民族博物館学芸員）、博物館教育
- 李 雪菲（大阪大学人文学研究科博士課程）、ジェンダー映画理論
- 小谷 七生（流通科学大学・大阪公立大学非常勤講師）、日本映画における「社会的弱者」表象、日本映画の歴史社会的分析、映画学
- 石田 由希（西南学院大学外国語学部准教授）、ホラー映画、現代英語圏文学（演劇・詩）
- 趙 政瀬（熊本大学大学院修士課程）、黒澤明、映画音響、音と画の対位法